

多文化共生のまちをめざして

北海道白老町 特定非営利活動法人NPOウテカンパ







北海道南西部の太平洋に面した白老町は、古くから先住民アイヌの人々がこの地で暮らし、日常の営みのなかからアイヌ文化を受け継いできた。令和2年には、町内のポロト湖畔に国立アイヌ民族博物館などで構成される「ウポポイ(民族共生象徴空間)」が開業し多くの人が訪れている。

特定非営利活動法人NPOウテカンパ(代表:田村直美さん)は白老町を拠点に、民族、世代、性別、障がいを超えた多文化共生を目指し、多様な「個」を持つスタッフとともに誰もが笑顔になれる居場所づくりに取り組んでいる。

10月、北海道白老東高校を会場に、ウテカンパ主催による「しらおいチュクフェス」が開催された。スポーツ、カルチャー、読書、音楽、食などを楽しめる全部で20の体験ブースが設けられ、ウテカンパとともに白老東高校の生徒も運営を担い、広報や各ブースの案内、スポーツコーナーを担当するなど、地域と学校が一体になるイベントとなった。

教室に分かれたブースを巡ると、「手話の世界」では、吉原和香奈さんが手話の体験講座を行っていた。ウテカンパのスタッフで聴覚障がいを持つ吉原さんは、手話は日本語とは異なる1つの言語であり暮らしを反映した文化であること、そして自分の言語となる手話により自分のアイデンティティを出せる大切さを伝えたいと話す。

「ユースカフェ・オレンジカフェ」では、ウテカンパのスタッフで助産師の長島英津子さん、看護師の川田幸香さんが相談コーナーを設ける。性や身体、心のことなど、なかなか話づらいテーマでも、カフェという形だからこそ自然に言葉にできる。「普段から話せる場所が大事」と長島さんは必要な支援につなぐ入口としての役割を担う。

「映像写真展・あの頃の白老」では、昭和62年の白老東高校開校当時の映像や、町内のポロト湖で憩いの時間を楽しむ当時の人々が映し出されていた。図書館にあるDVDのアーカイブを活用して企画した中谷公祐さんは、若い人にも映像をみ



てもらい、白老の昔からの変化を知ってほしい。少しでも地元の高校の力になれば」と来場者を迎える。

「アイヌ着物試着」では、ウテカンパのアイヌ文様刺繍講座を担う下河やエさんから、アイヌ着物を試着させていただく。近年はアイヌ着物の技術を覚えようとする若い人が増えているそうだ。

チユクフェスを担う白老東高校生にも話を聞いた。生徒会長を務める2年生の木村光来さんは、生徒会活動を通じて初めてアイヌ文化に深く触れ、アイヌ文化を伝えたい気持ちが強くなった。「喜分一心」（喜びを分け合い心をひとつに）をスローガンに目安箱でみんなの意見を取り入れ、今回のチユクフェスの経験をもとに、今度は学校祭でも地域と一緒に企画したいと力を込める。チユクフェスのチラシをデザインした2年生の細川瑠椰さんは、秋の色合いに小鳥のシマエナガをイラストして、外国人にも伝わるように英語表記も取り入れた。「個人と地域が直接つながれるのが白老東高校の魅力」と感じているそうだ。

生徒会顧問の岩瀬先生は「地域と一緒に活動できるのは、白老だからこそできる活動だと感じている。様々な大人との関わりから生徒が成長しているのを実感している。社会に出たときの力になる経験だと思う」と期待を込める。

チユクフェスの終わりにには田村さんから閉会の挨拶。手話を交えて「チユクフェスを高校でやりたい思いをかなえてもらい、皆さんからすばらしいサポートをしてもらい、ありがとう」と語りかける。

その後、白老町内で田村さんが営むコミュニティカフェ「ミナパチセ」を訪れお話を伺った。

白老町で生まれ育った田村さんはアイヌのルーツを持つ。自分自身のいじめ、離婚、母子家庭、病の経験を通じ、自分のルーツを受け入れる気持ちから故郷の白老に戻り、自分の夢だった「誰もがほっとできるカフェをやりたい」と始めたの



がミナパチセだった。

ミナパチセはアイヌ語で「たくさんの人が笑う家」という意味を持つ。お客さんとの会話のなかで「白老でこんなことがやりたい」という話を聞くと、「ミナパチセでやってみようよ」と背中を押し、ママカフェ、アイヌ文様刺繍講座、介護予防・健康促進のまちの保健室など、声を上げた人の思いを実現できる場になっていった。

2020年にはNPOウテカンパを設立。こうした活動が行政にも徐々に認められ、2021年からは「白老町地域女性活躍推進事業」、2022年からはスタッフの専門性を活かした「介護予防サロン・認知症カフェ」、2023年からは「手話通訳講師・通訳派遣事業」を受託し活動が広がっていった。手話通訳事業は、町の手話言語条例の制定後、地域にとって欠かせない取り組みだ。人となりがりやすい白老町の規模感は、新しい挑戦をはじめやすく、物事を実現しやすい面もあるようだ。

田村さんが大切にしていることとして、子どもと接するときもお互いに名前前で呼ぶことで「個を尊重すること」と、自分を大切に相手とつながる「自己愛」を挙げる。

どんな人でも特技や才能を持っている。「個」として生きることの大切さを伝えたい。そのためにこれからは「教育」にも力を入れていきたい。「肌の色が違う先生、耳の聞こえない先生、車椅子の先生」。いろんな先生がいる学校をつくりたい。いろんな大人がいて、いろんな生き方があることを伝えたい」と田村さんは語る。

「ウテカンパ」はアイヌ語で手を取り合う、手をつなぐという意味がある。この日のチュクフェスに集う人のつながり、ウテカンパの活動のつながりの積み重ねが、多文化共生のまち、白老町の未来を作っていくことと思う。

【連絡先】特定非営利活動法人NPOウテカンパ
メール：utekanpa@gmail.com